

---

# ハーレム目指して何が悪い

白告 介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハーレム目指して何が悪い

### 【Nコード】

N1558Y

### 【作者名】

白告 介

### 【あらすじ】

柴田速人はその日もオンラインゲームをして寝た。次の日起きると異世界だった。

その世界で速人はどう生きていくのか？

チート、主人公最強物です。ハーレム目指します。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。 よろしくお願いします。

## ブローグ

目の前に青白いエフェクトが飛び散った、ドラゴンが咆哮する。俺達は4人でパーティーを組んで、このドラゴンに立ち向かっている。

まあ今の俺達には全然弱い敵だ、そんなに苦労しないだろうと思う。本当にいつ見てもでかいな、と余計な事を考えながら奴から距離をとる。

「グアアギャーツ！」

この叫び声だけでは何度聞いても慣れない、次の瞬間迫り来る炎、隣から巨大な盾を持った人が飛び出してくる。

「助かった！ありがとうマサ」

俺はマサに礼を言って走り出す、ドラゴンの首元に近づくと自慢の双剣で切り付ける。

「グッ！」

直後に飛んできた尻尾に薙ぎ払われる。壁にすごい勢いで飛ばされる。なんて奴だ俺は悪態をつきながら立ち上がる。

「ハヤト！大丈夫！？」

ハル力が回復呪文を掛けてくれる、体から痛みが引いていく。

フラッシュエクスボーション  
「閃光の爆発」

後ろの方で呪文が唱えられてドラゴンに光が集まり、爆発する、サトルだ。

俺も双剣を持ち直して走り出す、ドラゴンの尻尾を避けつつ近づく、スキル『連続斬』を発動させる、右手に持った剣で頭を斬り付ける、次の瞬間には左の剣がくびを斬った、ドラゴンは苦しむがまだ倒れない、くそっ、しぶといやつめ。

「サトル！頼む！！マサ援護！！！」

俺は下がりながら叫ぶ、サトルが後ろで呪文を唱えていりる、ドラゴンがサトルに炎を吐く、がマサが出てきて盾で守る。

俺もタイミングを見計らって走り出す。

サトルが呪文を完成させる。

ヘルフレイム  
「火炎地獄！」

すぐにドラゴンが火に包まれる俺はそれを無視して火の中を走る、スキル『斬撃の嵐』を発動して目にも止まらぬ速さで切り付ける。

「ハア—ア—ア—ヤッ」

俺が切り終わるとドラゴンはゆっくりと倒れた。

画面にクエストクリアの文字が広がった。

俺は、安堵して伸びをしながらパソコンの画面から目を離れた。ふと壁に掛けている時計を見てみる。

「・・・2時15分か・・・フ、フワァー・・・ねむっ」

欠伸をして画面を見ると他のパーティーのメンバーたちが別れの挨拶をしていた、俺も挨拶をしてパソコンを切る。

俺がしていたオンラインゲームは『FIGHT QUEST』というゲームでダンジョンなどをモンスターを倒しながら探索するのだからなかなか凝ったゲーム内容としっかりしたサポートで人気がある。

俺は、このゲームにハマって学校から帰ると寝るまでやり続けている、別に俺に友達がいないくて他にやる事がないとかではない・・・・・・  
・・・本当だぜ・・・。

そんなしょうもないことを考えながら明日の学校の準備をしてベッ  
トに入った。

## 第1話 異世界へ

「……んっ……んん」

なにやら寝心地が悪いと思いながら目を覚ますと外だった……

えっと、俺ちゃんとベットで寝たよな？

………混乱してきた……まず、今の状況を把握しよう。

まず俺の名前は柴田速人、年は17で高校二年だ。

175センチのまあ特に特徴のない高校生だ。髪も染めてない黒だ。

昨日は、オンラインゲームでいつものメンバーとクエストをしてからベットで寝たはずだ。

遅かったし疲れてたんだ。

何が起こしたんだホントにと思って周りを見てみるとどこまでも草しかない草原だった。

こんな草原が日本にあるのか？もしかして海外か！！

よく見ると見たこともない草だ。

ふと自分を見ると布でできた服を着ていた。寝る時はジャージで寝たはずだが……んっこの服見たことあると思っていたら、昨日や

っていたオンラインゲームの初期装備にそっくりだ。

まさかゲームの世界に来たとか？

小説とかではよくある展開だが俺は遠慮したかったな。

試しにステータスと念じてみた。

すると目の前に文字が浮かんできた。

シバタ ハヤト

Lv:1

人間

自由民

17歳

平民

体力 100

筋力 999

知力 001

耐力 100

俊敏 999

器用 800

スキル

片手剣 100

双剣 100

ナイフ 10

隠密 100

ステータス確認

魔法

装備

布の服

皮の靴

鉄の剣

………うんっ、出ちゃったよ！

俺が使っていたキャラとステータスはほぼ同じだし、レベルと装備は初期に戻ってるけど。

俺は攻撃力と素早さを上げまくってたから、ステータスが偏っている。

魔法は全く使えないし、防御力や体力も低い。

まあその分剣だけで大抵のモンスターは倒せるようになった。

どうせゲームの世界に来るのならば魔法使えるようにしとけばよかった。

憧れるよね魔法。

スキルは双剣と片手剣と隠密がMAXでナイフが少し……んっ、見覚えのないステータスがある『ステータス確認』なんだこれ？

名前から考えると今見てるやつかな。

さて、どうしよう……本当にゲームの中に来たのか？

他に人はいるのか？

モンスターもいるのか？

俺は強いのか？

いろいろ考えたが答えが出ない、とりあえず情報が必要だ。

人がいる所を探そう、・・・・・・・・人が居ればな・・・・。

俺はそう思って歩き出した。

「誰もいねーー！」

あれから3時間ぐらい歩いてやっと道に出た。

どっちに行ったらいいか分らなので適当に歩いていたが誰にも会わ  
ん。

「道があるから人はいるはずなんだけどな」

今のところモンスターにも会っていないし何か悲しい。

弱いモンスターで腕試しがしたかったんだけどな。

俺はこのまま飢え死にするんじゃないだろうか？

町はないのか、道があるからあるはずなんだが。

不安になってきた。誰か出てこないかな。

そんなことを考えていると自然と少し急ぎ足になっていた。

「何だ!!」

突然どこかで大声がした。

## 第1話 異世界へ（後書き）

第1話でした。

これからはできれば2、3日に1回投稿したいです。

よろしくお願いします。

## 第2話 盗賊（前書き）

早く出来たので投稿します。

## 第2話 盗賊

「何だ！」

誰かが叫んだ。

んっ、俺か？

そう思つて周りを見てみるが、誰も見当たらなない。

声がした所に行くくと人に会えるかなと思ひ走り出した。

少し行くと目の前に馬車が止まっていた。

馬車を取り囲んでいる盗賊らしき男たち。

10人はいるだろうか。

馬車の近くには鎧を着た人が倒れていて、そのそばに高そうな服を着たおっさんが震えていた。

「なんだ、オッサンかよ」

出来れば貴族の女の子を救つて、その女の子に好かれるなんて展開を期待してたのに。

残念だ。

とりあえず話し掛けてみよう、何かこの世界の情報が分るかもしれ

ないし。

もしかしたら、あのおっさんが悪いかもしれない。

「すみませ〜ん」

呼びかけてみると盗賊たちは振り返った。

一人が話しかけてきた。

「あつ！なんだてめえは」

うわっ、いきなり不機嫌そうだ。

「通りすがりの旅人です」

ちょっとおどけて行ってみた。

「調子乗ってんじゃねえぞ」

余計怒らせてしまった。

面倒臭いやつだな、とりあえず何しているのか聞いてみようか。

「すみません、何してるんですか？」

ニコツと笑顔も付けてやった。

「何笑ってんだ気持ち悪いな。何してるって、そりゃ商人襲って商品を頂こうとしてんだよ」

気持ち悪いって・・・、傷付くな。

やっぱりか、日本よりは治安が悪いみたいだ。

それはそうだろうな、みんな剣持っているし。

とりあえず何か聞いてみよう。

「あのー、聞きたいことがあるんですが」

すると今まで話していた人の後ろからリーダーみたいな人が話し掛けてきた。

「おい、てめえ分かってんのか？俺たちは今強盗してんだよ」

「もういいじゃないすか、どうせ顔見られたんだから殺すんでしょっ？」

「ああ、やっちまえ」

まじかよ、結局何の情報も引きだせなかった。

あのステータスだから負けることはないと思うけど。

この世界でも斬られたら死ぬんだろうな。

ゲームみたいに復活はしないだろう。

近くにいた人が切り掛かってきた。

俺は焦って横に避けた。

うわっ、すごく速く動けるし相手が遅く感じる。これが俊敏999か。

「何っ！」

男が驚いてる。

剣を抜くと思ったより重くなかった。

筋力も上がっているみたいだ。

隙だらけの男に切り掛かる。

意外と軽く切れた。

鮮血が飛び散る。

男の首が飛んだ。

「うわっ！」

思わず声が出た。

吐きそうになる。

最悪だ人を殺してしまった。

自分でやっというてなんだがえぐい。

「てめえよくも！」

他の盗賊たちが来る。

迫る剣を避けて切り付ける。

また鮮血が飛び散る。

次に迫ってきた剣も避ける。

切りつける。

体が風のように軽い。

興奮してアドレナリンが回ってきた。

次々と避けては切り付ける。

全員殺すのにそんなに時間はかからなかった。

俺は返り血で真っ赤に染まっていた。

俺は、人を殺してしまった。

戦闘の興奮が覚めると自分のしてしまったことが恐くなった。

吐き気を必死に抑える。

相手は犯罪者だ。

殺さなければ俺が殺されていたんだ、ここは日本じゃないんだ。

そう自分を無理矢理納得させる。

そうしないと自分を見失いそうだった。

一人で呆然としていると不意に後ろから声が聞こえた。

### 第3話 奴隷商人（前書き）

調子がいいのでまた投稿。

### 第3話 奴隷商人

後ろからの声に振り返ると高級そうな服を着たオッサンがいた。

「あの、助けて頂いてありがとうございました」

「いや、別にいいよ」

いいから放っておいてくれ、俺は今、自己嫌悪中なんだよ。

「護衛の者もやられて危ういところでした。商品の奴隷も無事でしたし、どうお礼をしたらいいのか」

あの鎧の人は護衛だったのか。

商品も無事でよかった……って奴隷？

あー、そういうえばゲームでも一人でプレイする人のために奴隷を買って一緒に戦うってのがあったな。

何のためのMMOだっと思って、俺はパーティー組んでたから忘れてた。

「ど、奴隷？」

思わず聞き返す。

「はい奴隷でございます、あなた様は見た所冒険者みたいですが、パーティーを組んでいるわけでもないみたいですし、奴隷を買われ

ないんですか？」

と言われても金がない。

こう堂々と奴隷と言うんだから、奴隷が普通に認められているんだろう。

しかしこう普通に奴隷と聞くとなんだが嫌だな。

やはり現代人としては嫌悪感があるな。

「金があまり無いからな」

一応少ないことにしておく。

「それならその盗賊たちは賞金が掛けられていると思いますから、その賞金で買えると思いますが」

まじで、賞金があるのか。

「よろしければ町までお送りしますが、町で奴隷商をやっておりますオスカーでございます。店にもぜひ来てください。命を助けて頂いたので、安く致しますよ」

そう言って笑うオスカーさん。

「そうか、なら頼もう。そういえば賞金を受けとるにはどうしたらいいんだ？」

「えっと、武器を持って行けばいいんですが、知らなかったのです

か」

聞くと驚いた顔をしたが答えてくれた。

まずい怪しまれたか。

異世界から来たというのはあまり知られたくないから、ごまかそう。

「いや、田舎から出てきたばかりなもんで」

まずったかな？

まっ、大丈夫だろう・・・そう思っておこう。

馬車で町まで送って貰うことにした。

「なあ、これから行く町はなんて町なんだ？」

「冒険者の町マスラです。近くにダンジョンがあつて、冒険者が多いんです。アースファルト王国では二番目に大きい町です。」

んー、ゲーム内にはなかった国や町だな、そこまでは一緒じゃないのかな。

「そういえば、さっきの盗賊たちに魔法使いがいなかったけど、やっぱり珍しいのか」

「ええ、魔法の才能がある人は少ないそうです。ハヤト様は魔法を

「？」

「いや、俺は剣だけだ」

やっぱり珍しいのか。

そういえば日本語が通じている、異世界だからかな？

どうしてだろう？

まあ、便利だからいいや。

その後、オスカーさんと話して一年は365日で地球と同じだと分かった。

ほぼ地球と変わらんな。

黒髪黒目はいないことはないがそれなりに珍しいらしい。

それからオスカーさんと雑談しながら町を目指した。

## 第4話 冒険者ギルド（前書き）

今まで1話ごとが短すぎたので、少し長くしました。  
更新速度は落ちるかもですが悪しからず。

## 第4話 冒険者ギルド

「うわ」

マスラは予想してたより大きかった。

周りは柵で囲まれて正面に立派な門がある。

マスラに入ると結構人がいた。

出店みたいなのがたくさんあって、店の人たちが口々に客引きしている。

冒険者らしき剣や斧を持った人、ローブをきたいかにも魔法使いだという人がいる。

驚いたことに耳が尖っているエルフと思われる人や、背が小さくやたら筋肉質なドワーフっぽい人までいた。

そんな異種族に感動していると、オスカーさんに話し掛けられた。

「どうしました？」

「いや、俺の故郷には異種族がいなかったから」

「そうなんですか？ここら辺では普通ですよ」

と笑っていた。

決して嘘ではない・・・俺の故郷、地球ではいなかったからな。

十字路に差し掛かった時オスカーさんがこっちを向いた。

「その角の建物が冒険者ギルドです。盗賊たちの賞金はそこで貰えます。ギルドの登録もしたほうがいいでしょう。向かいが宿屋、私のやっている奴隷商はここを右に曲がった先です」

「親切にありがとう」

「いえいえ、命を助けられたのですから当然です。奴隷が必要になったら来て下さい。安くしますので」

「じゃあ」

そう言って盗賊たちの剣を入れた麻の袋を持って、オスカーさんと別れた。

麻の袋はオスカーさんに貰った。

まず、冒険者ギルドに行ってギルドに登録して、賞金でも貰いますか。

冒険者ギルドは、レンガの立派な建物だった。

中に入ると目の前にカウンターが3つあった。

右手には依頼書だと思われる紙が貼ってある掲示板がある。

カウンターは左が空いていたからそこに行く。

「すみません、ギルドに登録したいんですけど」

カウンターのの中にはメガネの若い女の人がいた。

いかにも、出来る女という感じがした。

結構、美人だ。

「はい、登録ですね。この紙に名前を書いて下さい。名前以外は別に書かなくてもいいですよ。あと登録に10セール頂きますがよろしいですか？」

「ああ、大丈夫だ」

何故お金があるかというと、オスカーさんに貰ったからだ。

ギルドに登録してない言うとお礼にとくれた。

オスカーさんの話からすると、1セールは大体100円ぐらいだと思う。

紙を見ると日本語だ。

俺がそう見えるだけかもしれないが便利でよかった。

まずは名前、柴田 速人。

年齢、17。

種族、人間。

技能・・・。

「すみません技能って何書いたらいいんですか？」

「使える武器や魔法などを書いて頂いたら依頼を紹介しやすくなります。別に書かなくても問題ありませんよ」

そうか、どうしよう。

とりあえず、剣、双剣と書いておく。

出身地は書けないな。

こんなもんでいいか。

「書けました」

「はい、柴田速人様ですね、私は受付のミリアです。少々お待ち下さい」

そういつて奥に入って行った。

周りを見てみると猫耳が生えている女の人がいた。

獣人もいるのか！？

やっぱり猫耳は萌えるなあと思っていたらミリアさんが帰ってきた。

「こちらがギルドカードになります、無くさないようにして下さい。再発行には100セル掛かります」

「分かりました」

「では、ギルドについて説明しますね」

「お願いします」

「このギルドではランクがEからAさらにその上にSまであります。ランクは依頼にも書かれていまして、自分の二つ上のランクまでの依頼しか受けられません。ランクを上げるには同ランクの依頼を10回か、1つ上の依頼を5回か、2つ上の依頼を2回成功させれば上がります。ただしAからSへはギルドで判断します。ここまでよろしいですか？」

「ランクによって変わるのは受けられる依頼だけですか？」

「いいえ、ランクが上がることに宿や他の店でも値引きして貰えます。ハヤト様はEからですから頑張ってください」

まじか早くランク上げたくなってきた。

「おお、それは」

「次に依頼ですが討伐、採集、護衛、他にも様々な種類があります。依頼は向こうにある掲示板で確認して紙をカウンターに持ってきて頂ければ、以来主に合わせる手はずになっています。依頼の報酬は一割ギルドが頂きます。失敗した時は罰金を頂きますので実力にあった依頼をつけて下さい」

ミリアさんはここで言葉を切った。

「依頼は一度に一つしか受けられないんですか？」

「はい、一つしか受けられません。しかし討伐や採集などは、証明の部位がありましたら、後から依頼を受けて頂いてもいいですよ。また、依頼の掲示板の横には賞金首が張り出されています。この者たちを捕まえるか討ち取った時はこちらにきて頂いたら賞金を渡します。殺人などの犯罪を犯した際には、賞金首になつてしまいますので注意して下さいね。ああ、もちろん賞金首や盗賊などは別です。」

焦った、いきなり賞金首にされるかと思った。

「また、パーティーを組んで頂くこともできます。その場合は一番下のランクの人の3つ上の依頼までが受けれます。パーティーは5人までです。奴隷もパーティーに含まれます、奴隷にランクがありませんので、主人のランクと同じになります。ハヤト様はパーティーを組んでいない様なので奴隷を買われるのですか？」

「んーやっぱり一人じゃ厳しいのかな？」

「そうですね、ランクが上がると厳しいでしょうね。パーティーを組むのも信用している人がいないと難しいですしね」

「そうですか、考えておきます」

やっぱり厳しいのか。

俺なら一人でもいけないことはないだろうが、目立ち過ぎるだろうな。

目立つのは避けたい。

「最後にギルドメンバーの揉め事にはギルドはあまり関わりませんのでお願いします」

なんて無責任な。

まあ、そんなものなのかな、荒くれ者も多いだろうし、やっかいごとが多いんだろう。

「あつ、そういえばここに来る途中で盗賊に襲われている人を助けて、その時に殺した盗賊の武器があるんですが、賞金ってもらえますか？」

「調べてみますので出して頂けますか？」

俺は袋から十本の武器を出した。

武器を調べるミリアさん。

「じつ、これはっ！」

びっくりした顔をしている。

何かまずい事でもあったのか？

「これは、今この町で暴れていた盗賊団です！ギルドでも行方を探

していたんです、助かりました」

身を乗り出して言ってくる。

か、顔が近い。

「そ、そうなんですか？」

「そうですよ、ありがとうございます。賞金は三万五千セールになります。」

セールとはこの世界の通貨だ。

三万五千セールって三百五十万円！？

まじか、一気にこんな大金が入るとは。

「三万五千セールです」

言いながら金貨三枚と銀貨五枚渡してきた。

金貨は銀貨10枚分さらに下には半銀貨、銅貨、半銅貨があるそれぞれ十枚で上に上がる。

「ありがとうございます、ミリアさん」

そう言って受付から離れて依頼書でも見てみようと思い、掲示板に近づく。

「おい、お前」

いきなり目の前のチャラチャラした男に話し掛けられた。

「え〜と、何ですか」

「ギルドに入っただけで、盗賊団を倒したからって調子に乗って、ミリアさんと親しそうに話してんじゃねえぞ」

「うわっ面倒臭！どこにでもこっぴどく弱いくせに偉そうにするやつっているよな。」

「てめえ！舐めてんのか？」

「えっ、声に出てた？」

「まずった。」

俺たちの声が周りの注目を集める。

男は周りを見て舌打ちをする。

「くそっ！覚えてろよ。せめて夜道には注意することだな」

捨てゼリフを吐いて出て行った。

さすがにギルドの中では暴れなかったようだ。

よかった、揉め事は勘弁だからな。

目立ってしまったよ。

俺も人目から逃げるようにギルドを出た。

## 第5話 宿屋

ギルドを出るとまだ日が高かったから、町をぶらつくことにした。

まず、武器を買ったために武器屋に行く。

武器屋は、いかにも職人の工房みたいな所に、武器が並べてあった。中に入るとドワーフのオッサンがいた。

「いらっしやい」

「すみません、双剣ってありますか？」

「おう、あるぜ」

そういつて指差した先には、綺麗な双剣が置いてあった。

「それは、ミスリルの剣だ」

ミスリルか！

まあ、最初の武器にしては上等だろう。

「オッサン、これいくら？」

「二千セールが二本で四千セールだ」

「よし、買った」

銀貨を四枚はらう。

オッサンは、剣を鞘に入れて渡してくれた。

ついでに、今まで持っていた鉄の剣を渡す。

店から出て、防具を買おうと思っていたけど、重いのが嫌なので止めておく。

この装備のままでいるのも嫌だったから、服屋に入った。

服屋では、黒のズボンとインナー、それから黒の外套と全身黒の格好にした。

剣は左右に一本ずつ引っ提げた。

目立たない様に黒にしたけど、黒づくめに左右の剣は目立つ気がするのは気のせいだ。

服は全部で五百セルだった。

以外と高い・・・。

その後もぶらぶらしていると、細い道に入った。

戻るのは嫌なので進んでいると、前に何やら揉めている5、6人の人たち。

「うわ、最悪」

嫌だったが気になるので近づく。

獣人の女の子が5人の若者に囲まれていた。

「何してるんだ？」

とりあえず聞く。

「うるさいな！俺は今いらついているんだ！ギルドで気に喰わないガキと言ひ合いをして、むしろくしゃしている所にこの獣人のガキがぶつかってきたのに謝らねえんだ。獣人の癖に生意気な奴だ」

よくしゃべるな。

やっぱり獣人って差別とかあるのか？

このチャラチャラした男いらつくな……この男見たことあるな。

あつ、ギルドで絡んできたやつだ。

つて気に喰わないガキって俺のことか。

「ねえ、俺のこと覚えてない？」

「あつ！」

俺の顔をジロツと見てくる。

「てめえ、ギルドでは恥かかせてくれたな」

「いや、自滅でしょ」

「黙れ！もういいお前らやっちまえ」

4人が殴り掛かってくる。

剣はまずいと思って、素手で対応する。

ステータスのおかげで力は増している。

「ぐはっ」

「ゴバッ」

「へぶらっ」

「がつ」

すぐに4人には地面とキスしてもらう。

「こんな事二度とすんじゃねえぞ」

言いながらチャラチャラした奴も殴る。

獣人の女の子は驚いた顔をしていた。

俺より少し年下みたいで、猫耳としっぽがついていた。

「あ、ありがとうございました。あたしはスン。冒険者になったばかりなの」

「おう、いいって。俺はハヤト。俺も冒険者になったばかりだ」

猫耳に感動していたから焦る。

「本当にありがとう、この恩は必ず返すから」

そう言って走り去ろうとした。

「ちょっと待って」

俺は呼びとめる。

「何？」

こっちを警戒しているが気にせず用件を言う。

「恩はここで帰してくれないか？」

「こ、ここで！何をさすの？」

涙目で見てくる。

かわいい、思わず抱きしめたくなった。

「何を勘違いしているか分からないけど、俺は道に迷っているんだ。ギルドの所まで案内してくれないか」

「そ、そんなことなら早く言つてよね」

スンは顔を真っ赤にして言った。

訳分がからん。

スンに案内して貰つて無事ギルドまで戻つて来れた。

「ありがとう、スン」

「あたしの方こそありがとう」

恥ずかしそうに言つと走り去つて行つた。

もう日が暮れかけている。

今日はもう宿屋に泊まろうと思って、ギルドの向かいにある宿屋に入った。

「いらっしゃいませ」

宿に入ると、おれと同じ年ぐらいの女の子がカウンターの中にいた。

短めの茶髪で目がクリクリしていてかわいい。

「えーと、部屋は空いてますか？」

ちよつとドキドキしながら話し掛ける。

やっぱり、かわいい娘はいいな。

「はい、空いてますよ。お一人様ですか？」

「はい、そうです。一泊いくらですか？」

「30セールです。ご飯は20セールで付けることができます」

「じゃあ、ご飯付きで。とりあえず、10日分」

銀貨を一枚渡す。

「はい、ありがとうございます。お釣りの500セールになります」

半銀貨5枚を受け取る。

「私は、ニーナです。両親がこの宿をやっているので、手伝っているんです」

やっぱり娘か。

これで店の主人とか言われたら、驚きの若さだ。

「えーっと、俺はハヤトです。一応冒険者をしています」

「冒険者ですか、怪我の無い様にして下さいね」

ニコツと笑い掛けてくる。

か、かわいい。

「どうかしましたか？」

「い、いえ何でもありません」

見とれていると話し掛けられてあせる。

「そうですか、では、部屋に案内しますね」

「お願いします」

ニーナさんは、カウンターから出てくると、階段を上って行く。

俺は急いで追いかけた。

「わあ、いい部屋ですね」

部屋は、そんなに広くないが、綺麗にまとまっていいていい感じだ。

「夜ご飯は日が暮れてから、朝は日が昇ってから食堂に来て頂ければ食べれます。お風呂は、1階にあるのでご自由にどうぞ」

おお、風呂があるのか。

勝手な想像で無いかと思っていた。

「分かりました」

「では、じゅっくり」

ニーナさんは出て行った。

「まだ、日が出ているし、先に風呂入ってこよう」

「あゝ、気持ちよかった」

風呂から出て来ると、もう日が暮れていた。

晩飯を食いに食堂に向う。

途中で見知らぬおばさんに話し掛けられた。

「あんた、新しいお客さんだってね。ニーナから聞いたよ。あたしはニーナの母親のシミルだよ」

ニーナのお母さんか。

イマイチ似てない。

「よろしく願います。食堂って向こうですよね？」

「ああ、そつだよ。食事を作っているのは夫のバールだよ。味は保証するよ」

「それは楽しみだな」

「ぜひニーナとは仲良くしてやってくれないかい？ ずっとこの宿で

働いてるから、同年代の友達がいらないんだよ」

「えっ！もちろんいいですよ」

「じゃあよろしくね」

そう言うなり去って行った。

嵐の様な人だった。

食堂に着くと他にも何人が客がいた。

一人の客は他にいなかった。

みんなパーティーを組んでいるか、奴隷を連れたりしているのかな。

一人なのでカウンターに座る。

ウェイトレスがよってきて、注文を聞いてくる。

料理名なんて分からなかったから、オススメを聞いてみてそのままのんだ。

運ばれてきた料理は、パンっぽいのと、何かの肉を炒めたものにスープだった。

シミルさんが言ってただけあって味は美味しかった。

「ごちそうさま」

美味しかった。

どんな料理が来るかビクビクしていたから満足だ。

食堂を後にして部屋に戻った。

「今日は疲れたな」

一人でつぶやくとベッドに寝転んだ。

今日はいろいろあったな。

元の世界で心配させているだろうか？……まあ友達はいなかったからあまり悲しまれていないだろう。

なんだか目から水が……。

親には悪いとしたな。

まあ、この世界でも生きていけそうだし心配すんな。

何たって俺は、チートだし。

無双とか出来るだろう。

もう、開き直って女の子たちを侍らして、ハーレムでも作りたいな。

地球では女の子と縁がなかったからな。

これは元の世界に未練が無いかも。

よし、目指せハーレム!!

そんな事を考えながら眠った。

## 第6話 エルフ

朝起きると知らない天井だった。

「そうか、異世界に来たんだ」

昨日考えた結果、一人は目立つし何かがあるか分らないと思った俺は、奴隷を買おうかと思っている。

出来れば魔法が使えるとうれしい。

それに俺はこの世界の常識に疎いから、そこら辺も聞きたいし。

「よし、今日は奴隷商に行こう！」

何だか独り言が多くなってきた気がする。

早く話し相手が欲しい。

食堂でご飯を食べて、宿を出る。

町は朝から活気があった。

奴隷商に着く、建物は意外と綺麗で大きかった。

中に入って受付に話し掛ける。

「すみません、ハヤトと言う者ですけど、オスカーさんは居ますか」

「少々、お待ち下さい」

奥に入って行くと、少しして戻ってきた。

「こちらにどうぞ」

ついていくと、応接間に案内された。

少しすると、相変わらず高そうな服を着たオスカーさんが現れた。

奴隷商つてのは儲けるみたいだ。

「ハヤト様、今日は来て頂いてありがとうございます」

「ああ、オスカーさんのおかげでギルドに登録出来たし、賞金を手に入れる事もできた」

「今日は、どのような案件で？」

「奴隷を探しに来た」

「どのような奴隷ですか？」

「その前に聞いておきたいんだが、奴隷は、どんなやつがなるのか？」

「奴隷は犯罪者が身売りなどですね」

「犯罪者は危険が無いのか？」

「大丈夫ですよ、主人の命令を聞く魔道具を付けていますので、犯罪行為をさせる以外の命令には逆らえません」

魔道具か、魔法があるから当然か、自分が買った奴隷に殺されたくはないからな。

「出来れば魔法を使える、女の子はいるか」

やっぱりかわいい女の子の主人になりたいでしょ。

しかも命令を聞くって言っている。

男の夢だな。

「魔法を使える女の子ですか？ん〜、あっそういえば、エルフの若いのが居ました。女の子と言えるかは微妙ですが」

「まじですか！！」

エルフか、エルフなら美人のはずだ。

本当にいるとは。

「でも、エルフは値が張りますよ」

高いのか、相場がどれくらい分からないから分かん。

三万セーブルまでならいける。

「とは言っても、命の恩人ですしあのエルフは少々口が悪いので、

少し安くしますけど。一旦連れて来させますので少し待っていて下さい」

そう言つて、出て行つた。

エルフか、楽しみだな。

思わず笑みがでる。

「これは・・・」

思わず声が出た。

銀髪でつり目がちな緑眼のエルフが入ってきた。

ものすごく美人だ。

背は俺と同じぐらいで、細い。

何と言つてもスタイルがいい。

あの胸に顔を埋めたい。

「いかがですか。なかなかでしょう。ちなみに処女ですよ」

見とれているとオスカーさんが話し掛けてきた。

し、処女！

奴隷の価値に関わってくるんだろう。

唾を飲み込む。

是非とも欲しい。

「い、いくら何ですか？」

恐る恐る聞いてみる。

「ハヤト様には恩もありますし、二万セールでどうでしょう」  
「買います！！」

即決した。

そう言いながら金貨二枚を渡す。

「ありがとうございます。では契約をしますから立って下さい」  
すると近くにエルフが来た。

右手に着けている腕輪に手を持って行く。

オスカーさんが呪文を唱えると、腕輪が光った。

「これで、ハヤト様が主人になります」

びっくりしているとオスカーさんが話し掛けて来る。

「奴隷を解放したい時は出来ます。また、奴隷には住む所と必要な食事を与える義務があります」

そう言つて、解放の呪文を覚えてくれた。

「えっと、俺はハヤト。これからよろしく」

「・・・・・・」

反応がない。

「えゝ、君の名前は？」

「・・・・それは命令ですか？」

「いや命令じゃないけど、教えて欲しいなと」

キリがないと思ったのか、不機嫌そうに答える。

「私はミルシアです」

それっきり黙ってしまった。

先が思いやられる。

俺は、オスカーさんに挨拶して、ミルシアを連れて外に出た。

とりあえずミルシアの装備を整えようと思った。

「ミルシアって、魔法を使えるんだよね？」

「はい」

「何か武器って要るの？」

「ナイフ」

「防具は何か着けるの？」

「要らない」

「じゃあ、服は要るよね」

「要る」

会話が弾まない！

とりあえずナイフを買った。

五十セールの安いのを買った。

多分護身用だろう。

ずっと魔法を使う訳にもいかないからな。

服屋ではフード付きのローブを買った。

他にも下着や普段着を買った。

百五十セールになった。

一通り装備を整えたし、ギルドに登録しに行こう。

「ミルシア、ギルドに登録しに行くよ」

「はい」

さっきからミルシアは、はい、か、いいえ、しか言わなくなった。

悲しい、やっぱり奴隷として買われたから、嫌われてるのかな。

ギルドに入ると周りから注目された。

俺が美人のエルフといえるからだろう。

受付には昨日のミリアさんがいた。

「すみません、この子を登録したいんですけど」

「はい、この用紙に記入して下さい」

俺が登録料の十セルを払っている間に、記入し終わっていた。

名前だけで他は空欄だ。

まあいいか。

問題はないし。

「ミルシアさんですね。ギルドの説明はいりますか？」

「いいえ、俺が説明しときますから大丈夫です。ミルシア行くぞ」  
そう言つてギルドを出る。

向かいの宿屋に入ると、シミルさんがいた。

「すみません、二人部屋に変えてほしいんですけど」

「おや、奴隷でも買ったのかい？料金はこのままでいいよ。」

「ホントですか？ありがとうございます」

シミルさんに二人部屋に案内してもらつと、一人部屋と大きさはあまり変わらない部屋に、ベッドが二つ置いてあつた。

「では、ごゆっくり。食事はもう大丈夫ですよ」

「じゃあ、今から食事にします」

俺はミルシアをつれて食堂に行った。

食べ終わつて、風呂にも入つて部屋に戻ると、ミルシアはもう出ていた。

俺はミルシアにギルドの説明をした。

それが終わると、することがなくなった。

「あゝ、もう寝るか？」

そう言って自分のベッドに入って寝ようとしていると、後ろから話しかけられた。

「何もしないの・・・？」

「えっ」

驚いた、俺の気持ちを讀まれたかと思った。

「そりゃ、したいけど。ミルシアが嫌そうだったから」

「なんで？」

「えっ」

よく聞こえなかった。

するとミルシアはベッドに入って行った。

まあいいか。

俺も夢の世界に旅立った。

## 第7話 依頼（前書き）

いつの間にか、アクセスPV25000、ユニーク数5000、お気に入り登録200を超えていました。

日間ランキングにもランクインしていて驚きました。

みなさんお読みいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第7話 依頼

「こ——、——人——」

ん？何か聞こえるな。

「ご主人様、ご主人様」

ご主人様？誰だこんなかわいい声にご主人様などと呼ばれている、  
うらやましいやつは。

「ご主人様！ご主人様！！」

はっ！近くで殺気が。

身の危険を感じて飛び起きると、近くにミルシアがいた。

あの殺気はミルシアからなのか？

「とりあえず聞きたいことがある」

「何でしょう、ご主人」

俺が言うと、ミルシアは表情を変えずに答えた。

ご主人様？聞き間違いじゃないよな。

さっきから何回も聞こえてたからな。

「あゝ、まずそのご主人様ってのは何だ？」

「ご主人様が私を買ったので当然です」

ご主人様、ご主人様ってなんか変な感じになるな。

「そのご主人様ってのは止めてくれないか？」

「それはご主人様の命令でも無理ですね」

何故か反抗的になっている。

こんな感じだったかな？

「そ、そうか。それから、さっきの殺気は何だったんだ？」

さっきの殺気なんつって。

「何でもありません。それから面白くない事を考えないで下さい」

無表情で答えるミルシア。

怖！心を読まれた。

「心を読んだりしてません」

やっぱり読んでるじゃん。

買う奴隷間違えたかも。

顔で即決するんじゃないかった。

「朝食の時間ですよ」

ミルシアがメイドみたいになっていた。

朝食を食べると、ギルドで依頼を受けようと思ってギルドに向かった。

ミルシアの実力を見たいし、金も稼がないとダメだからな。

ギルドに着くと俺たちは、目立った。

全身黒ずくめの俺に、ローブを着た美人のエルフのミルシアだからな。

視線が痛い。

主に俺にの嫉妬の視線が。

男の嫉妬は醜いぞ。

視線を無視して、掲示板に行く。

ランクFからDの依頼書を見ると、掃除とか、荷物持ちなどの、簡単な依頼が多かった。

Dにはいくつか討伐系の依頼があった。

魔物の名前はよく分からなかったので、ミルシアに聞いてみる。

「なあミルシア、討伐系の依頼でどれがいいと思う？」

「討伐系ですか？ならこれが初心者が最初に受けるのにいいと思います」

と言って、一枚の依頼書を指差した。

その紙を見ると、ゴブリンの討伐と書かれていた。

数は十匹、報酬は100セルが。

まあ、どんなのかやってみよう。

受付に持って行くいつものミリアさんがいた。

「これお願いします」

「はい、ゴブリン10匹の討伐ですね」

話し掛けると笑顔で答えてくれた。

やっぱり笑顔だよな。

隣のミルシアに睨まれた。

怖いな。

「はい、そうです」

「では、ゴブリンはこの町の裏にある森にいます。倒した証拠にゴブリンの耳を持って来て下さい」

耳か、えぐいな。

「分かりました、ミルシア行こう！」

「分かりました、ご主人様」

周りから殺気が集まる。

ご主人様つての止めてくれないと、俺の命に関わる。

町を出て裏に回るとすぐに薄気味悪い森が広がっていた。

「なあミルシア、ゴブリンってどんなやつなんだ？」

森の中を歩きながら聞く。

「えっ、ご主人様は、ゴブリンを知らないのですか？」

残念ながら知らないんだよな。

多分俺がやってたオンラインゲームに出てくるやつだろうが、詳し

くは分からない。

「ああ、その事は後で詳しく話すから」

「分かりました。ゴブリンは小さい二足歩行でこん棒を持っている、醜いやつです」

ん、分かりにくいが想像のやつと同じだ。

「分かった」

少し森の奥に行くと、ゴブリンが10匹出て来た。

「ミルシア、魔法を使ってみて」

ミルシアの実力を知るために魔法を使わせる。

「分かりました」

そう言つて、集中するミルシア、綺麗だ。

思わず見とれていると、突然声がした。

「ウインドスラッシュ  
風の斬撃」

見えない風が、ゴブリンに向かって飛んでいく。

風によってゴブリンを切り裂かれる。

「おお、やるじゃん」

俺は、残ったゴブリンに向かって走る。

双剣を自分で使うのは初めてだ。

2本の剣を抜く。

近づき流れる様に次々切り裂いていく。

「はあ、すげえ」

自分で自分のしたことに驚いた。

「ご主人様は、強いすんね」

ミルシアが驚いていた。

自分でも驚いていた。

ミルシアもなかなか強いみたいだし、もっと強い魔物もいけそうだな。

とりあえず、ゴブリンの耳をそぎ落とし袋に詰め込んでいく。

気持ち悪いな、これもやっていけばなれるのかな。

町に戻ると、ギルドに向かう。

ギルドに入るとミリアさんにゴブリンの耳に渡した。

「はい、たしかに受け取りました。こちらが報酬の１００セールになります」

Dランクの依頼だったから、後一回で次のランクに上げれるな。

明日にでも、依頼を受けよう。

「じゃあ、また明日きます」

ギルドを出て、宿屋に戻る。

「お帰りなさい、ご飯はどうしますか？」

ニーナが話しかけてきた。

「ただいま。ご飯は今からもらいます」

思わずニーナの笑顔に笑う。

「ご主人様、気持ち悪いですよ」

何だよいいじゃないか、この無邪気な笑顔がいいんだよ。

その後ご飯を食べて、部屋に戻った。

## 第7話 依頼（後書き）

ご意見、ご感想などがありましたらどんどんお寄せ下さい。

励みになります。

## 第8話 情報（前書き）

アクセスPV100000、ユニーク20000突破しました！！！！

日間ランキング6位、週間ランキングにも入ってました！！

お気に入り登録数も1000件超えました！

みなさん読んでいただきありがとうございます。

## 第8話 情報

部屋に戻ると、俺はベッドに座った。

ミルシアは、側で立っている。

「座ったら？」

俺が勧めるけどミルシアは首を振る。

しょうがないからそのまま話を切り出す。

「えーと、俺の事だけど、ぶっちゃけると、俺は異世界つまりこの世界じゃない所から来たんだ。だからこの世界の事はほとんど知らない。だから色々教えて欲しいんだ」

「・・・それは、本当ですか？」

ミルシアは、怪訝そうに聞いてきた。

それはそうだ。俺もいきなり異世界とか言われたら怪しいと思う。

「まあ、これが現実なんだな。俺も信じたくないんだけど」

そう言って自嘲するように笑う。

「理解は出来ません」

やっぱり無理だよな。

「でも、ご主人様の言う事を信じることは出来ます」

本当か？

「本当に信じてくれるのか？」

驚いて聞く。

「はい、信じます。この世界の事を教えたらいいんですよ？」

「ああ、それに俺が分からない事で、変な事をしないように注意してくれ」

「分かりました。何も知らないご主人様が下手な事をして恥を搔かない様に注意します」

「そ、そうだが」

何も知らない訳じゃないんだけどな。

その後寝るまでこの世界の事を聞いた。

この世界はマルノーゼと言って、大きな大陸と小さな島々がある。

大陸には、大きな国が4つと小国がいくつかある。

俺がいる国は、大陸の国の1つのアースファルト王国と言って、王

政をしいていて、貴族もいる。

最大の領土を持っていて、この世界の中心だ。

他には、宗教の国、神聖ミルバル国。

この国は、魔法が盛んな国で内部の事がほとんど分からない、秘密主義の国。

農業の国イルファ。

この国は人口が多く、民主主義の国。

平和を求めて軍隊を持たない国だ。

魔物退治は冒険者に任せているようだ。

エストータルは工業が盛んな国。

ドワーフなどの異種族が多く住んでいる。

この4つの国と他の小国が大陸にひしめいている。

この世界では今、戦争は起きてない。

最近増えてきた魔物の対応で精一杯のようだ。

魔物は、何らかの魔力によって生きている生き物のことを言う。

魔物は知能が高いものは少なく、ほとんどの魔物が人を見たら襲ってくる。

中には、人の言葉を理解して人と共存している魔物も少ないがいる。魔物以外にも馬のような普通の動物もいる。

これは、魔力を持っていないので、地球の動物とほとんど変わらない。い。

魔法は魔力量と魔力を魔法に変換する能力が必要なため、使える人は少ない。

魔法を使うには、まず周りの魔力を自分の中に取り込み、その魔力を利用して、魔法を使用する。

魔法には、呪文を唱えたり、魔法陣を使う等の方法があるのだが、慣れてくると単語で魔法を使える様になる。

ミルシアは短い単語で使っていたから、それなりに強い魔法使いなんだろう。

魔法には、基本属性の火、水、風、土、電の五つに、それぞれの強化属性の炎、氷、嵐、地、雷があり、他に光、闇、移動、空間、回復がある。

ミルシアは、水、風、土、氷、嵐、移動を使えるみたいだ。

俺は、魔力量が多いみたいだから魔法を使う事も出来るみたいだ。  
多分ステータスを上げると使えるようになるんだろう。

俺は剣を極めるつもりだから魔法を使う予定はないけどな。

ステータスが何なのか気になってミルシアに聞いてみたけど、何の事が分からないようだった。

この世界にステータスの概念は無いようだ。

それが何で俺についているのか分からないけど、異世界からの召喚者だからだと思っておこう。

ステータスが無かったらこの世界で生きていけないからな。

この世界には、異種族がいる。

エルフや、ドワーフ、獣人などである。

エルフは、長い耳が特徴で、美男美女が多い。

1000年程生きるエルフもいる。

エルフは多くが森の中に集落を作って、他種族との関わりを断って生活している。

ドワーフは小柄で筋肉質、寿命は500年ぐらいだ。

ドワーフは鍛冶をしている者が多い。

獣人は、動物の耳やしっぽが特徴で、身体能力や五感が鋭かったりする。

獣人は能力を生かして冒険者になる者が多い。

異種族に対しては、人間たちから差別があつたりする。

お金は、世界統一でセーラ。

やっぱり1セーラ100円ぐらいのようだ。

半銅貨が1セーラ、銅貨が10セーラ、半銀貨が100セーラ、銀貨が1000セーラ、金貨が10000セーラだ。

俺が今持っている9900セーラあれば当分は十分に生活できる額だ。

これがミルシアに教えてもらった、この世界の情報だ。

ミルシアは、話し終わるとすぐに寝てしまった。

俺は、ミルシアからの情報を頭でまとめていると遅くなった。

寝ようと思いいベッドに向かうと、隣のミルシアが目に入る。

無用心にきれいな顔をさらして寝ている。

つい、襲いそうになった。

昨日あんな事を言ったからには、手を出せない。

俺は悶々と朝まで過ごした。

## 第9話 異常

「ご主人様、起きて下さい」

ミルシアに起こされる。

「・・・ああ、おはよう」

昨日は悶々としてあんまり眠れなかったから眠い。

そうも言ってられないから、今日も朝食を食べてギルドに向かう。

ギルドに入るとまた嫉妬の視線が集まる。

視線をスルーして掲示板に向かう。

ギルドのランクを早く上げたいからまたDランクの依頼を受けたいな。

「今日もDランクの依頼を受けたいんだけど、ミルシアはどれがいいと思う?」

「そうですね、これなんかどうでしょう?」

そう言って指差す依頼書には、『シャドウウルフの群れ討伐』とあった。

報酬は1匹につき10セールで、場所は昨日と同じ町の裏の森の奥みたいだ。

「シャドウウルフの群れってどのくらいの数なの？」

ミルシアに聞いてみる。

「2、30匹が普通かと思います」

「それなら結構儲かるな・・・って2人するには数多くない!？」

2人で2、30匹は多いだろう。

「ご主人様なら大丈夫です!!」

「何にこやかに言ってるの、俺に丸投げか!？」

「・・・・・・・・」

「はあ、ミルシアも手伝えよ」

まあ、Dランクだし大丈夫だろう。

依頼書を持って受付に行く。

いつもの様にミリアさんの所に行く。

すでにミリアさんが担当みたいになっている。

「この依頼を頼みます!」

依頼書を見ると、ミリアさんは驚いた顔で俺達の事を見てきた。

「おふたりで大丈夫なんですか？」

やっぱりもつと大人数用じゃないのか！？

「いやゝ、多分大丈夫だと思います」

「大丈夫です。ご主人様ならこの程度一瞬です」

ミルシアが自信満々に言ってくれた。

ミリアさんも苦笑いじゃないか。

「・・・と、とりあえず大丈夫だからお願いします」

「分かりました、シャドウウルフの証拠は牙です。気をつけて行ってきて下さい」

ミルシアを連れてミリアさんから逃げる様にギルドから出た。

森に向かいながらミルシアにシャドウウルフの説明を受ける。

「シャドウウルフは人間の腰ぐらいの小柄で黒い毛並みです。知能は以外と高く群を作り、連携して獲物を囲んで狩ります」

「連携するのか厄介だな。なるべく囲まれない様にしないとな」

「ご主人様、私を守って下さいね？」

「自分で戦わないつもり!?」

「もちろん魔法を使って援護はします」

「頼むよ！ミルシア！群れだったら魔法の方が効果的なんだからな」

「・・・ご主人様の剣の腕なら問題ないと思いますが」

「そうかもしれないが援護は頼んだぞ！」

「分かっています」

森に着いて奥に向かっていると、いきなり前からゴブリンが出てきた。

「ミルシア！」

ミルシアに呼びかける。

「頼みます」

頼まれた。

1匹だったので右手で剣を抜きながら近づき、剣をふる。

ゴブリンは反応出来ずに血を出して倒れる。

「なあ、ゴブリンって集団行動するんじゃないかってつけ？」

基本的に弱い魔物は集団で行動する。

「そのはずなんですが、周りには居ないです。おかしいですね」

1匹だけはぐれたのかな？

「まあ、考えても仕方がないから行こうぜ！」

そう言って歩き出す。

「ミルシア、シャドウウルフの居場所はまだなの？」

少し歩いていると暇になった。

まだ着かないのか。

「まだまだです！さっきから何をキョロキョロしてるんですか？」

「だって暇なんだよ！」

その時、前方から何かが走って来る音がした。

複数だ！

「なんだ!？」

驚いていると前の茂みから黒い塊が飛んできた。

「まだじゃなかったのか！」

俺は後ろに避けながら叫ぶ。

「ミルシア!! 援護頼む！」

「了解です」

冷静な声に安心して目の前のシャドウウルフに剣を抜きざまに切る。

前から20匹ぐらい迫って来る。

ウォーターボール  
「水砲！」

後ろでミルシアの声が聞こえた。

水の塊が飛んでいって、何匹かのシャドウウルフに当たる。

当たった奴らは飛んでいく。

以外と威力があるみたいだ。

俺も走りだす。

目にも止まらない速さで進む。

近くにいたやつに右手の剣を振り下ろす、そのまま回転して左手の剣で周りを薙ぐ。

「おらっ！！」

2、3匹が血を出して崩れ落ちる。

「ウインドスラッシュ  
風の斬撃！」

ミルシアが言々と空気を切り裂く様な風を感じる。

また数匹が血を出して倒れる。

残った6匹が俺を囲む。

俺はまずいと思って前にいる奴に向かう。

他の奴らが俺に向かって来るが無視する。

前の奴に近づいて顔面に剣を走らせる。

返す力で後ろに飛び掛かってくるのを叩き落とす。

残りの4匹も流れる様に切る。

「流石ですご主人様」

シャドウウルフを全て倒すとミルシアが言ってきた。

「ミルシアの援護も助かったよ！」

「このくらい当然です」

少し嬉しそうに言う。

俺は調べたい事があったからミルシアに証拠を集めてきて貰う。

ミルシアが離れると、俺は「ステータス」と念じる。

もう敵を結構倒しているからレベルが上がっているんじゃないかと思っただ。

シバタ ハヤト

Lv.5

人間

自由民

17歳

平民

体力 100

筋力 999

知力 001

耐力 100

俊敏 999

器用 800

振り分けポイント 60

スキル

片手剣 100

双剣 100

ナイフ 10

隠密 100

ステータス確認

魔法

装備

黒い外套

ミスリルの剣

ミスリルの剣

皮の靴

レベルが5になっていた。

振り分けポイントの60はステータスに振り分けられるんだろう。

何に振り分けようかな。

やっぱり、死にたくないから体力とか耐力に振り分けよう。

どうやって振り分けるんだ？

30ずつ体力と耐力に振り分けるように念じる。

出来た！

体力と耐力は今まで全然上げてなかったからこれから上げよう。

ステータスを見ていると、ミルシアが戻ってきた。

「ご主人様どうしました？」

「いや、何もない、そういえばシャドウウルフってこんな近くに出るの？」

「もつと奥に居るはずなんですが、何故かは分かりません」

「分からないか。まあ、考えても仕方がないから帰ろう！」

何だか嫌な予感がする。

言っと町に向かって歩き出す。

以外と近くでシャドウウルフに会ったから、予想より早く森を出られた。

町を見ると、煙が上がっていて、叫び声が沢山聞こえてきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1558y/>

---

ハーレム目指して何が悪い

2011年11月16日19時41分発行